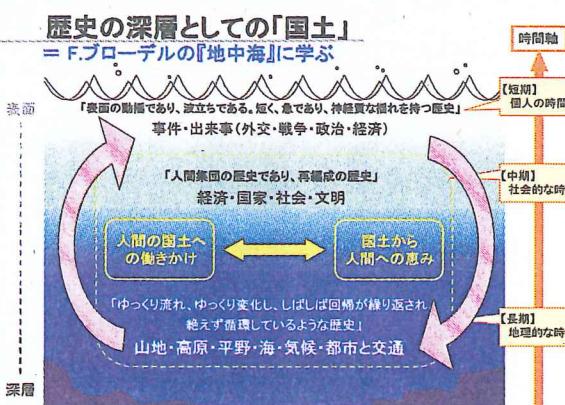


公共事業と教育-学びの場から考える-

No. 13

フランスの歴史学者ブローデルは、国土と歴史の関係を分かりやすく解説している



フランスの歴史学者ブローデルは、国土と歴史の関係を分かりやすく解説している
= F.ブローデルの『地中海』に学ぶ
「表面の歴史であり、神聖なる隠れを持つ歴史」
事件・出来事(外交・戦争・政治・経済)
「人間集団の歴史であり、再編成の歴史」
経済・国家・社会・文明
「人間の国土へ働きかけ」
「ゆっくり流れ、ゆっくり変化し、しばしば回帰が繰り返され
絶えず循環しているような歴史」
山地・高原・平野・海・気候・都市と交通
私たち公共事業に携わる者、建設産業に従事する者、高校院で土木工学を教えて（学んで）いる者は、技術的素養だけではなく、こうした歴史地理学的素養を身につけた上で、インフラ形成の必要性。
効果を国民に伝えていかなければなりません。

フランスでは、コレージュ（中学校）の4年間をかけて、ゆっくりと古代から現代にいたる歴史を学びますが、このうちフランス革命を含む18世紀以降の近現代史は、生徒の年齢・発達段階が進んだ後半2年間をかけて学習します。また、リセ（高校）では、1年目に古代から19世紀前半までを学習し、残り2年間で、その後の近現代史を扱います。つまり、フランスの歴史教育は近現代史を極めて重要視しており、日本でよく聞くような「授業時間が足りず、明治以降の近現代史はほとんど学習しなかった」ということはありません。

しかし、フランスの歴史教育も日本と同様に、政治史や人物史、事件・出来事が中心であるため、国土形成の歴史やインフラストラクチャーの役割・効果、インフラ整備に携わってきた人々の苦労などを体系的に学習することは難しいと言わざるを得ません。例えば、コレージュの歴史教科書では、インフラに関する記述は極めて限定的で、産業革命期19世紀の鉄道整備を取り上げている見開きページが存在する程度です。

F.ブローデル『地中海』に描かれた「本当の歴史」

公共事業と 教育

学びの場から考える
国土学アナリスト 森田 康夫

●●13

な時間（中期）、個人の時間（短期）毎に歴史が語られています。

ブローデルは、地理的な時間（長期）を、「深層の歴史」、「人間を取り巻く環境と人間との関係の歴史」、「ゆっくりと流れ、ゆっくりと変化し、しばしば回帰が繰り返され、絶えず循環しているような歴史」と呼んでいます。（）では、山地の地理的制約とそこに住む人々の暮らしが、平野における土地改良の歴史、気候の変化とそれに伴う農作物の収穫、パンの値段の変動、あるいは交通路としての陸路や海路、航海の仕方、都市の機能など、人間と人間を取り巻く地理的環境、つまり人と国土との関係が詳細に調べ尽くされています。

この「深層の歴史」の上に姿を現す「緩慢なリズムを持つ歴史」、「さまざまの人間集団の歴史」であり、再編成の歴史」が取り上げられ、経済（時間距離の障壁、人口動態、貴金属の流入と物価上昇、地中海産小麦の均衡と危機など）、国家（オスマン・トルコ帝国とスペイン帝国の起源、官僚制度、地方自治、財政難など）、社会（領主、農民、ブルジョワ階級の変化、窮乏と強盗行為など）、文明（キリスト教世界とイスラム教世界、ユダヤ人の運命など）、戦争の諸形態（戦争と技術、國家、文明との関係など）の歴史が説明されています。

個人の時間（短期）に至ってようやく、「伝統的な歴史」、「出来事の歴史」が登場します。具体的には、レバントの海戦（1571年）をはじめとする戦争の歴史、外交の歴史などが説明されますが、ブローデルはこの階層の歴史のことを、「表面の動搖であり、波立ちである。短く、急であり、神経質な流れを持つ歴史である」と表現しています。

つまり、ブローデルは、歴史の深層には国土があるて、この国土に働きかけ続けなければ、歴史の表面にある経済的出来事や政治的出来事を本質的に変えていくことは出来ないのだ、といつことを教えてい

出典：日刊建設工業新聞

12面